

<落合秘史シリーズ>

“京都皇統（代）”やその“舎人（とねり）”を通じて、特に明治維新後の歴史の真相を落合莞爾氏が記した「落合秘史シリーズ」やそれに関連する金融ワンワールドについての著書が刊行されている。（特に断りの無い限り、出版社は成甲書房。）

- ・金融ワンワールド 地球経済の管理者たち（2012/4/20）
- ・明治維新の極秘計画 「堀川政略」と「ウラ天皇」（2012/11/29）
- ・南北朝こそ日本の機密 現皇室は南朝の末裔だ（2013/4/11）
- ・国際ウラ天皇と数理系シャーマン 明治維新の立案実行者（2013/8/9）
- ・奇兵隊天皇と長州卒族の明治維新（2014/1/22）
- ・明治天皇“すり替え”説の真相
（2014/8/19、学研パブリッシング、斎藤充功・共著）
- ・京都ウラ天皇と薩長新政府の暗闘（2014/9/2）
- ・欧州王家となった南朝皇統（2014/12/3）
- ・日本教の聖者・西郷隆盛と天皇制社会主義－版籍奉還から満鮮経略への道－
（2015/5/20）
- ・京都皇統の解禁秘史 天皇とワンワールド（2015/10/17）
- ・天皇と黄金ファンド 古代から現代に続く日本國體の根本（2016/4/20）

最新刊「天皇と黄金ファンド」では、“落合よ、そろそろすべての秘事を明かしてもよい頃であろうぞ”との京都皇統からの舎人文書が出ている以上、骨子となる中心的な内容はここまでだと言える。

ここでは、皆さんが実際に読まれることを期待して、各巻の詳細について論じることはしないが、“京都皇統”からの伝聞だからと言って、鵜呑みにする姿勢はよろしくない。そこで、重要な部分とその考察をまとめ、一連のシリーズを読む際の一助として頂きたい。

1：落合秘史シリーズ概要

(1) 南北朝から明治維新への大きな流れ

南北朝では皇統が分裂してしましたが、大塔宮護良（オオトウノミヤモリナガ）親王の皇子が北朝・光厳天皇の籍に入れられて崇光天皇となり、南北両朝が秘密裏に統合された。その際、偽装崩御などの手法が採られ、以後の歴史ではこれが真似られた。

そして、これを契機に大塔宮の子孫が欧州に渡り、王族と関わるようになって、オランダ、ベルギーなどの王家となった。そうした目的は、欧州に点在するウバイド・シュメル文明（落合氏に従い「シュメール」ではなく「シュメル」と記述する）の遺民を結ぶネットワーク＝ワンワールドネットワークを構築するためである。ウバイド人の移動の西端がケルト、東端が日本であり、縄文後期に渡来したウバイド人が族種橘氏、彼らと共に船団を成して渡来したのが族

種平家で、旧石器時代から居た安曇氏と共に後期縄文時代を築いた。彼らをまとめて縄文海人（アマ）と言う。このアマの系統が皇室に后（妃）を出し続けてきた。

彼らは熊野水軍を利用してマラッカ（彼らが建国？）からインド洋を西に進み、セイロン島経由でアラビア海を通過してホルムズに上陸し、イラン領内を北上、そして黒海を渡り、コンスタンチノーブルからヴェネツィアに入り、西大寺の黄金を元手として繊維業などから財を成し、いわゆるヴェネツィアン・コスモポリタンとなった。そして、王侯貴族と関わりを持ち、最終的にはオランダ、ベルギーなどの王家に入り込んだ。特に、オランダではオラニエ公（オレンジ公）がその典型で、彼らが設立したライデン大学は、欧州に於ける彼らの活動拠点となった。江戸時代の鎖国で、長崎の出島で支那以外に貿易が認められていたのがオランダという理由もここにある。

後に共産革命思想が発生してフランス革命が勃発すると、その余波は世界中に広がって行った。当時、日本は鎖国だったが、これはイエズス会の覇道一神教に乗っ取られないようにするためだった。しかし、前述のような海外ネットワーク（大塔宮ネットワーク）を通じ、早かれ遅かれ、日本もその洗礼を浴びることになることを掴んでいた。その際、最も危険なのは、半島からの身分の無い流入者が多く居た長州である。そのため、同心や足軽といった武家社会の末端にあって武士身分を有さない下級の家臣と共に、開国の手柄を立てさせ、卒族という身分を与え、革命の被害を最小限に抑え込んで開国しようとした。これが、明治維新の真の目的である。

なお、昭和帝の後・良子（ナガコ）は護良の“良”から採ったものである。これはすなわち、昭和から時代が大きく変化することを意味する、大塔宮ネットワークの策である。

(2) 明治維新の真相と誤算

外国からの開国要請は、まさしく海外大塔宮ネットワークからの圧力であり、ペリー、フルベッキ、グラバーなどその系統である。その時の、国内の影の統帥者とでも言うべき存在が“魔王”こと朝彦親王である。朝彦親王の指示のもと、孝明天皇は偽装崩御して堀川御所に入って國體（こくたい）天皇となり、海外との関係に従事した。代わりに、表に出た政体天皇は、長州の田布施に匿われていた南朝系の大室寅之祐（オオムロトラノスケ）である。

護良親王の血を引く大室家を“玉（ぎょく）”として周防国熊毛郡に匿い、佐藤甚兵衛が大室家を保護し、大室家を守るため、興正寺の別院を田布施に設けていた。そして、吉田松陰の実家の萩の杉家は、大室寅之祐を世に出す役目を担っていたのである。

こうした流れから、維新及び大政奉還はすべて筋書き通りの“やらせ”であり、その中心を担ったのが孝明天皇、徳川慶喜、中山忠能（タダヤス）、正親町三条実愛（オオギマチサンジョウサネナル）、岩倉具視である。いずれも、南朝

系の國體護持勢力であり、坂本竜馬などはその手下である。

しかし、中には誤算も生じた。それは、山縣有朋を筆頭とした長州閥が政府内で権力を握ったことにより、強欲化したことである。薩摩の大久保利通などもこれに追随したが、この流れが後に陸軍（山縣が基礎を創った）の暴走や、官僚の利益独占構造に繋がった。

開国のもう 1 つの重要な目的は、日本を世界経済に巻き込むことである。その本質はヴェネツィアン・コスモポリタンであり、幕末の江戸幕閣を切り回した勘定奉行・小栗忠順（タダマサ）も実は大塔宮の系統と推定され、彼の暗殺死は偽装で、実は生き延びて渡米し、フィラデルフィアで三井物産の基礎を創り上げた。小栗はフィラデルフィアで通貨の交換比率の見直しの交渉に挑み、小判と金貨の分析実験を基に主張の正しさを証明し、アメリカの新聞で絶賛されたほどの才があった。他に、渋沢栄一や益田孝が國體財務衆の双璧として活躍したが、明治幣制は小栗忠順の遺産とも言えるものである。

裏を返せば、ヴェネツィアン・コスモポリタンの元手となっている資金は日本由来、ということであり、現在の世界経済は日本の資金（黄金）がベースとなっているということである。

明治維新では改暦も実施されたが、これは欧州市場経済活動の元となっている暦を西洋暦に合わせる必要があったためである。

なお、小栗は後にマニ教的なクエーカー教徒の長となったとされるが、今上（平成）陛下が皇太子時代、クエーカー教徒のヴァイニング夫人から教育を受けたことの裏には、このような事情があったからである。

(3) マニ教

聖徳太子が大陸に派遣した佐伯氏の子孫が日本に律宗をもたらし、唐招提寺を創建した鑑真和上である。その目的は、メソポタミアから中央アジアを経てウイグルの国教となったマニ教の思想を日本に招致することだった。当時、マニ教は世界宗教と化す勢いだった。

大乘仏教の形で導入されたマニ思想は日本に根付き、マニ教を实践した行基菩薩の非人救済思想が西大寺の叡尊菩薩に伝わって西大寺流律宗となり、それが忍性菩薩から文観に伝わり、更に天海僧正によって八事山興正律寺にたどり着く。この西大寺が國體財務衆の要である。

(4) 國體と政体

ここまでに“國體”という言葉が何回か出て来たが、國體とは国家の在り方であり、領土—民—文化—宗教とこれらの中核を成す皇室との相互関係のこと。これに対して、政体とは統治機構のことで、対内的・対外的権力のことであり、政治権力故、暴力装置である軍事力も伴う。

國體とは、“私”のためではなく、“公”＝日本社会を構成するあらゆる階層と家族のために存在する政治制度である。

國體の理念と政体の都合が矛盾することはしばしば発生するので、時には國體側は政体側から邪魔されるが、國體側はその理由をわざわざ政体側に説明したりはしない。何故なら、國體が危機に瀕した場合、情報を公開することは直ちに外敵を利することになるからである。そのため、外から見ていると互いが対立しているように見えるが、そうではない。故に、國體側はそのような特定秘密を公開しないので、犠牲が生じることがある。しかし、それは國體側が元より承知の上の“大義のための犠牲”なのである。

(5) 縄文アマと金融

ウバイド系縄文アマの本質は、黄金の保有と管理である。欠史八代こそ、縄文アマ王家である。欽明朝には、ウバイド・シュメル時代に東西に分岐したワンワールドの大陸騎馬勢力が入れられたが、それは日本のアマ王朝が騎馬系勢力に対抗するため、アマ系大王を天孫系に交替させた。

任那に進出して立てた城市国家の任那城(みまき)で、扶余族にいたウバイド天孫を父系、安曇アマを母系とする任那天孫族を創設し、その王子イニエをヤマトに招聘して第10代・崇神天皇とし、入れ替わりに第9代・開化天皇の弟のヒコフトオシノマコトが満洲・羅津(らじん)に渡り、扶余系狛族(こま)から騎馬術を学んで八幡騎兵隊を養成し、狛族の中にいたウバイド天孫を父系とし、アマ王統を母系とする八幡天孫族を創設した。この、開化から天孫族の崇神への政権譲与こそが、“国譲り”の本質である。

崇神朝で不祥事が生じたため天孫皇統を更新することとなり、八幡天孫を迎えるために仲哀・神功のコンビが活躍し、仲哀が偽装死して羅津に渡り、入れ替わりに八幡天孫ホムダワケ=第15代・応神天皇を神功皇后が迎えて帰朝した。

応神が招いた半島在住の秦氏(融通王)が百済120県の技能民を移民させ、応神が持参金として持ち込んだ満洲砂金をファンドとした応神朝のもとで日本列島経済は高度成長したが、やがてワンワールドから文化・経済・政治など各方面での国際化を催促され、そのために大伴金村が武烈天皇を操縦し、継体天皇を創って、満洲・羅津から招いた八幡天孫の欽明朝に橋渡しした。

欽明朝を支えた蘇我氏は、ヒコフトオシノマコト、すなわち、羅津八幡の子孫で、フトオシ→タケシウチの宿禰→葛城襲津彦→蘇我石川麻呂→韓子→高麗→稻目→馬子と直系相続した羅津八幡の同族で、一部が羅津でフトオシ子孫に仕えて満洲蘇我氏となり、ヤマト蘇我氏との連絡に当たった。

ヤマト蘇我氏では、任那天孫の母から生まれたため、その名も蘇我韓子が新羅征伐に出征した際、僚将紀大磐との八百長芝居で偽装死して羅津に渡り、羅津八幡系あるいは八幡天孫の娘に産ませたため、その名も蘇我高麗が帰国子女となり、高麗→稻目→馬子となり、欽明朝を支える役回りとなった。

応神が日本列島に里帰りした際、この黄金ファンドを伴った理由は、日本皇室がウバイド人の正統だからと考えられるが、以後は皇室管理下の國體黄金ファンドとされ、応神朝の富国強兵策を信用財として支えた。それが、やがて回

収されて各地域文明に貸与され、ワンワールドの世界戦略のために利用されてきた。

そのため、羅津のある満州及び朝鮮半島のいわゆる“満鮮経路”は極めて重要であり、日韓併合や満州国建国もこういったことを念頭に置く必要がある。

縄文アマの安曇系真田氏、熊野系和田橋氏、土師系菅原氏・大江氏、美濃源氏系土岐氏は強い同族意識を有し、縄文巨石文明に基づいて互いにイシヤ（石屋）と呼び合う、國體財務衆である。

なお、同じような“アマベ”を名乗る丹後の一族は古イスラエルの支族で、縄文アマに寄生することが目的で“アマ部”を名乗った。何故、紛らわしいアマを名乗ったのかは不明だが、時の國體系が使用を認めたことは確かである。

2：考察

(1) 南北朝、維新について

確かに、真相を知っている者から聞かなければ知り得ない情報で、しかも、歴史の情勢に鑑みて、辻褄は合っていると思われる。誰が、偽装死など考えつくであろうか？また、世界金融や欧州王家に皇室の血が入っているなどは！

政体と國體の役目をはっきり分け、裏から世界を仕切っているのは実は日本であり、その血統は皇室、というのは極めて興味深い。現在の日本社会では戦後の国際共産主義工作に依る個人主義が顕著になり、なかなかこのような國體論は理解され難い故、“国のための大義”ということ軽んじられ、敵視される傾向にある。それ故、少しでも國體護持のような政府が出現すると、マスコミを使ってあるゆる方向から徹底的に攻撃し、潰そうとする。

(2) マニ教

マニ教の思想を日本に招致する、ということだが、そもそもマニ教とはどういった宗教なのか知る必要がある。（以下、主に Wikipedia 参照。）

マニ教とは、ササン朝ペルシャのマニ（A. D. 216 年～276 あるいは 277 年）を開祖とする（善悪）二元論的な宗教である。マニ自身、グノーシス系教団の父の影響を受けているので、ユダヤ教・キリスト教・グノーシス主義の流れを汲んでおり、ペルシャ発祥のゾロアスター教や、それまでローマ帝国の下で広まっていたミトラス教の影響も受けたものである。更に、仏教なども影響しているが、基本はゾロアスター教であり、釈迦やイエスを預言者と見なす。従って、当時の世界に普及していた主たる宗教を包含するので、各地に広がって行った。

落合氏に依ると、これが大乘仏教へと姿を変えた、とのこと。釈迦の教えを忠実に実行し、阿羅漢としての涅槃に到ることを旨とした上座部仏教に対し、俗世間で生活しながらも、最終的にはブッダの境地に至ることができると主張する大乘仏教は大衆に受け入れられた。

日本に於けるマニ思想の大乘仏教とは、ゾロアスター教の拝火を護摩炊きとして取り入れ、救世主思想＝弥勒（マイトレヤー、ミトラス）思想を軸とし

たものと考えられる。欧米に於ける 3 大救世主教は聖書をベースとしているので排他的だが、それらの影響を受けているとは言え、元が多神教的なミトラス（元はアーリア人由来の契約の神）の影響も受けているので、仏教の様々な菩薩や神道の神々を受け入れ、神仏習合となったのである。

すなわち、救世主教ではあるが根源的なシュメールの多神教的性質に戻ったが故、排他的一神教に対抗するものとして、ウバイド・シュメル文明由来の縄文アマたちが広めたと考えられる。

しかし、原始キリスト教徒が秦氏の中核ならば、大乘仏教＝マニ教とは、本来のキリスト教を隠すための隠れ蓑とも言えるものであり、その目的は、公開すべき時が来るまで霸道一神教から護るため、とも言える。確かに、神道の大元である京都皇統の口から“原始キリスト教”などとも言えるはずもない。

(3) 縄文アマとアマベ

落合氏は、欠史八代は縄文アマ王家であり、丹後のアマベ氏は縄文への寄生一族と言い、これらは京都皇統からの情報とされている。しかし、これらは本「日本のルーツ研究と弥栄へのシフト」ブログで公開されている内容とは大きく異なる。

確かに、黄金の保有と管理という点では、落合史観も十分有り得ることだが、そこで抜けている最大の点は、国宝にも指定された海部氏系図がまったく検討されていないこと、古代は政祭一致のため祭祀が最も重要だがその解釈が無いこと、邪馬台国についての記述が無いこと、である。以下、これらに着目して考察する。

①海部氏系図と邪馬台国

海部氏が寄生一族ならば、何故、その系図が国宝に指定されるのか？そこには、表に出せない理由があるはずである。それこそ、海部氏が邪馬台国の大王家だったということに他ならない。

詳しい考察は本ブログを参照して頂くとして、日本列島の歴史的な流れとしては、落合史観の正しいと思われる部分も含めれば、以下のようになる。

・環太平洋文明圏縄文王国（安曇氏）→縄文王国（和田橘氏）→弥生時代（海部氏・徐福系物部氏、邪馬台国）→大和朝廷（応神以降、秦氏）

記紀の系図は海部氏系図を基に創られ、天村雲命を神武天皇になぞらえ、神宮創祀を遡らせるため、年代操作も成されている。

本ブログでの考察では、崇神はオトヨノミコトであり、全体として海部氏系と見なしている。しかし、海部氏系は直系の海部氏・尾張氏系（尾張氏は兄弟分家）と、婚姻関係を結んだ徐福系＝葛城氏がある。ここで、神武は縄文から弥生への転換点、応神は邪馬台国から大和朝廷への転換点で、それぞれ大王家が替わっている。それが“神”という字で暗示されているとしたら、崇神の時もまた、替わっていると考えるのが妥当である。ならば、オトヨノミコト＝崇

神はトヨの弟的存在ではなく、婚姻を結んだ徐福系物部氏＝葛城氏と見なすのが妥当だろう。この時点から、海部氏の直系は丹後に戻り、半島（主に新羅）との外交と交易を担い、まつりごと（政、祭）は纏向で葛城氏と海部氏の兄弟分家である尾張氏が共に手を携えて行った、と考えるのが妥当である。

すなわち、崇神に至る欠史八代の大王は縄文アマではなく海部氏であり、后（妃）として縄文アマを娶っていたのだろう。

②祭祀

古代で最も重要なことは祭祀である。つまり、どの神を祀るのか、ということであり、最も権力を握っている一族の神が最高神となる。

海部氏はイスラエル十支族の大王家で、草薙神劍（鉄劍とアロンの杖）を持っていたことからエフライム族と考えられるが、それはサマリア＝小さなシュメールの大王家であり、イナンナを最高神としていた。その神髓は“不老不死”である。その海部氏は縄文には無かった鉄器を有していたため、戦わずして勝ち、和平のために縄文王国と婚姻を結び、弥生時代の幕開けとなったわけだが、ならば、和平を結んだ縄文王国の一族の最高神もイナンナであったに違いない。イナンナは太陽女神であり、豊穡神であり、航海の女神でもあるから、縄文の女神として相応しく、“縄文のヴィーナス”などの土偶として残されているわけである。

しかし、縄文王国は環太平洋文明圏の一族や、渡来して来た橘氏などの混合王国であり、多神教だから、この和平工作を良しとしない一族も居たことだろう。その最大の勢力が、卑弥呼に最後まで抵抗していた狗奴（く）国である。卑弥呼の邪馬台国が都祁野（つげの）付近だとしたら、それよりも南とされる狗奴国は奈良以南（当時は湿地帯～山岳）であり、それは和田橘氏の本拠地である。従って、卑弥呼に最後まで抵抗していた狗奴国とは、和田橘氏であると考えられる。

ならば、橘氏の最高神はイナンナではなかったということである。では、彼らの最高神は誰だったのか？

・橘氏＝ウバイド系縄文アマの本質は黄金の保有と管理であり、後にワンワールドネットワークを構築したが、それは國體としての裏の活動である。

・海部氏の権力委譲後、縄文アマ系が皇室の後（妃）を出した。后（妃）は皇室にとっての裏とも言える。

・記紀では、イザナギとイザナミから誕生した三貴神の内、月読命は隠れたことになっている。天照を祀る伊勢の神宮の元は海部氏だが、スサノオもまた海部氏由来の豊受大神と同義である。

どうやら、橘氏＝ウバイド系縄文アマこそ月読の本質であり、月をシンボルとしたのは地球の主エンキと、エンリルの息子でイナンナの父であるナンナルであり、ニビルにとって最も重要な黄金を最初に扱っていたのは地球の主エン

キであり、エンキは海神でもあったことからすると、橘氏の最高神はエンキだったのだろう。地球の主を最高神としていたからこそ、イナンナを最高神とする邪馬台国に最後まで抵抗していたのである。

橘氏が海部氏の邪馬台国（ヤマトの国）に権力を委譲した後、しばらくして半島経由で原始キリスト教徒の秦氏が渡来し始めた。彼らの中核はユダ二支族だが、十支族も多く存在し、彼らは改宗していた。その大王が応神である。応神が満洲砂金を持参金として持ち込んだのであれば、黄金を重視する縄文アマが見逃すはずはない。そこで、秦氏と手を組んでそそのかしたのかどうかは不明だが、出雲族のある者が御神宝を秦氏に渡してしまい、その兄弟間で殺人が起きてしまった。それがきっかけで最終的に海部氏は秦氏へ王権委譲することとなり、代わりに応神が海部氏に婿入りすることとなり、これにて邪馬台国時代は終了し、大和朝廷の始まりとなった。

すなわち、“敵の敵は友”の論理で、海部氏を快く思っていない縄文アマの一族が秦氏と同盟し、海部氏は王権の座から降ろされたのである。以後、皇統は基本的に秦氏、后（妃）は縄文アマとなった。そして、悲劇の出雲族は何かにつけて崇る神として、丁重に祀られるようになった。

③縄文アマと海部氏の棲み分け

大和朝廷設立後の役割分担は、表の皇統は秦氏、裏の黄金の管理と運用は縄文アマである。では、海部氏系はと言うと、海部氏系の祭祀的本質は“不老不死”であり、その妙薬は硫化水銀の丹生（にゅう）で、海部氏系は丹生に関わる。全国の重要な寺社の配置には、丹生鉱脈に深く関わっている所があり、空海の足跡などもそれに関わる部分が多く（空海は海部氏の祖の一人である眞名井御前と深い関係にあった）、寺社の楼門などに丹塗が多いのも不老不死を願ったことであり、丹生一族はまさしく海部氏と同族である。

また、丹生は蓬莱伝説などの元になっており、秦の始皇帝が求めたともされる。秦帝国はペルシャ系十支族王国であり、始皇帝の使者、徐福の団は丹生のために同じ十支族の海部氏と和平を結び、物部氏となったわけだが、他に不老不死で有名なのが、海部氏が建国に関わった新羅の王子、天之日矛（天日槍）の玄孫タジマモリがもたらしたとされる非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）である。この実質は橘であり、日本に古くから自生していることからすると、海部氏が渡来する前から橘氏が居たということの暗示であろう。

皇統は基本的に秦氏、后（妃）は縄文アマとなったものの、危機に瀕した際には海部氏系が登場した。それが、尾張氏からの后であり、継体天皇であり、天武天皇である。神宮の祭祀もまた、変えられてはいるが、海部氏の邪馬台国の祭祀を受け継いだものであり、八咫鏡のオリジナルは、海部氏が代々手渡しで継承している息津鏡・辺津鏡で、卑弥呼が神事で使用し始めたものである。そして、三種の神器の1つである草薙神剣は尾張氏の熱田神宮で祀られ、皇居にあるその写しは、勾玉と共に皇位の証となっている。

④アマ部について

海部氏は単なる十支族の大王家ではなく、サマリア＝小さなシュメールの大王家だから、シュメール王家から連なる血統である。イスラエル十支族とユダ二支族が血統的に関係無いことは、三笠宮殿下など古代オリエントの研究者らが明らかにしているから（詳しくは本ブログの様々な資料をご確認頂きたい）、“ヘブライの民”という括りで考えると間違ってしまう。

つまり、海部氏＝アマ部氏は本来“天部氏”であり、天神族である。故に、抵抗されたものの、最終的に邪馬台国としてこの国を統一できた。海部氏が天神族であることは、海部氏の豊受大神を祀る外宮で千木が外削ぎとされていることで暗示されている。（内宮の内削ぎは地祇を暗示する。）

当然、海部氏も大船団で渡来した。大船団を率いる頭領であることは、例えば海部氏系図の18世孫・建振熊宿祢（タケフルクマノスクネ）が丹波・但馬・若狭の海人300人を率いた水主（かこ）などに反映され、同族の尾張氏が治める名古屋の中心地にも水主という地名があることで示されている。

また、当時、日本の表玄関は大陸や半島との交易の窓口となっていた丹波～出雲の日本海側であり、海部氏はその交易を取り仕切っていた。そして、海部氏の祖、瓠公（ココウ）や脱解王（ダツカイオウ）が半島に渡り、新羅を建国した。その地域には、特に鉄鉱石が豊富に存在したからであり、当時は鉄を制した者が時代を制した。新羅が何かにつけて悪く言われるのも、それが海部氏系に関わることだからである。

さて、羅津は応神とその黄金に関わる拠点とされるが、ここは日本海に面する港湾都市で、昔から天然の良港であり、場所的には新羅ではなく高句麗・渤海国の地だが、日本海を挟んだ半島や大陸との交易を海部氏が一手に仕切っていたのであれば、この地も例外ではない。

そうなると、王権委譲後に天部が海部とされ、姓（かばね）として職掌を表す直（あたい）が与えられて海部直となり、それを國體側が認めていたということは、黄金の輸送に関わる秘密経路には海部氏の協力が不可欠だったことを暗示していると考えられる。

⑤ウバイドとシュメール

ウバイドは前シュメールであり、シュメール文明が起こったからといって、ウバイド人がどこかに追いやられたとか、逃げたと考える必要は無く、同化したと見なしてもまったく問題無い。

大洪水後、アヌナキは人類に少しずつ文明を授け、ようやくシュメール文明と言える時期に多くを伝授した。そこからエジプト、インダスと次々に文明を开花させて行ったわけで、ウバイド人が文明を伝えたわけではない。

シュメールでは一定期間毎に都が移動し、その度に最高神も変化した。王家はそれぞれの最高神を崇敬し、その王家は、最高神の血を受け継いでいる場合もあった。従って、シュメールの王家と言っても様々な神の血統があるわけで、ニビルの掟に従えば、できる限りアヌやエンキ、エンリルとの血が濃い者が優

遇されたのであろうが、時代を経るに従い血は薄くなるから、一概にどこの王家が最高なのか、とは言いきく、各王家が主張し合っていたというのが実情である。おそらく、橘氏と海部氏との間にも、そのような論争があったと考えられる。

京都皇統からの情報に依る落合史観では、シュメールを隠すが如く、ウバイドに重点が置かれているので、京都皇統はシュメールの真相を頭にしたいのではないのであろう。

⑤古代に於ける偽装死や八百長

文字がある時代では、記録として確実に残るので、偽装死や八百長といったことが成され、何らかのヒントを与えてそれを示唆している、ということは考えられる。故に、南北朝時代や明治維新に於けるこれらの話は、辻褃が合うならば、それなりの説得力を持つ。

しかし、文字が無かったとされる古代、しかも、正史としての記紀が編纂される数百年以上も前の時代のことを、わざわざ偽装死や八百長話など仕組む必要は無く、必要であれば尤もらしい筋書きの話を創作すれば良いだけのことである。

古代にまでこのような考えを持ち込み、落合氏は“壬申の乱も八百長”などと見なしているのは、南北朝や明治維新の原型が古代にあったと思わせ、海部氏・尾張氏系の真相を隠さんがための京都皇統の策と思われる。

(4)まとめ

南北朝や明治維新の真相については、落合史観は辻褃が合い、かなり説得力がある。しかし、“崇神朝で不祥事が生じたため天孫皇統を更新する”こととなったものの、その理由が示されていないのは極めて不自然で、また、落合氏は“尾張氏のごとはどうも良く解らない”と言っているのも、海部氏を単なる寄生一族と見なしているからであり、それは、シュメールや海部氏・尾張氏の真相を外しているからに他ならない。

落合史観の情報源たる京都皇統は、開化から天孫族の崇神への政権譲与こそ“国譲り”の本質とし、異星人が関与するシュメール、邪馬台国を含む海部氏や出雲族の真相については触れて欲しくないようである。最新刊「天皇と黄金ファンド」にある“落合よ、そろそろすべての秘事を明かしてもよい頃であろうぞ”との京都皇統からの舎人文書は、それを表している。まして、三種の神器や心御柱の話題に触れてもいけないのに、“すべての秘事を明かす”とは、これ如何に???